

遠回り

第31号 目次

令和六年四月十日
認定NPO法人
ロシナンテス 発行

01 ピックアップ

P1.....マザーシェルター2棟目建設を開始

02 スーダンだより

P2.....軍事衝突から1年、模索する支援
P3,4...スーダン人スタッフの手記

03 ザンビアだより

P5,6...結核の早期発見、ポータブルX線の有効性
P7.....スマホアプリによる産科健診の実証事業
P8.....眼科にサングラスを寄贈

04 読み物

P9.....ザンビア駐在の必須アイテム
P10...曇外蒼天：日本はどう結核に立ち向かったのか
P11...日々ツラツラ日記：JICAスーダン35周年

05 イベント、国内活動

P12,13...イベント案内 / イベントレポート
P14.....能登半島地震の支援
P15.....アフリカの国際教育プロジェクト

06 事務局からのお知らせ

P16...古本などの寄付
P17...スーダンへのメッセージ募集 / 会場募集
P18...事務局だより

01 ピックアップ



ザンビアで2棟目の マザーシェルター建設を開始



2棟目のマザーシェルの建設地をチサンバ郡チコンコメニ地域に決定しました。郡内の20の医療施設を調査した結果、この地域では自宅出産数と上位の病院への紹介数がとびぬけて多く、約6割の妊婦さんが診療所での出産を避けていることがわかりました。その背景を調べると、診療所への電気や水の供給不足や、待合室がない等の設備環境への不満があることがわかりました。待合室のない診療所では、出産兆候が来てから長距離を歩いて行かざるを得ず、自宅出産や路上出産につながってしまいます。マザーシェルターを建設することで、こうした課題を解決し、診療所で安全・安心な出産ができる環境を整えることを目指します。

2月16日に工事の開始を宣言する起工式が盛大に行われました。参加した地域の女性たちからは、「高い交通費を払って街の病院に行かずに済む」「出産待機施設のおかげで慌てて行かずに済む」といった期待の声が聞かれました。すでに井戸の掘削や基礎工事が進んでおり、5月の完成を目指しています。



起工式に集まった住民に
産前健診の重要性を発信する職員

02 スーダンだより



スーダン軍事衝突から1年、模索する支援

スーダンでの軍事衝突が発生してから4月15日で1年になります。2024年3月11日現在、スーダン国内では2月半ばから数週間におよぶ通信遮断が発生しており、一部の地域では、通信手段が復旧されているとの報告もあるものの、大半の地域では依然繋がらない状況です。現地の状況を報道する海外メディアも極端に少なく、私たちのスタッフとの定期連絡も一部途絶えてしまっている状況です。

一方、周辺国へ難民として避難してきた人々の過酷な生活状況が報告されています。IOM(国際移住機関)やUNOCHA(国連人道問題調整事務所)などの報告によると、隣国チャドには約55万人、中央アフリカに約3万人、南スーダンに約57万人、エチオピアに約5万人、エジプトに約45万人、そして国内で避難している人々は900万人いると言われています。また、国際社会の関心がパレスチナ・イスラエルの軍事衝突に移ったことで支援資金の不足が指摘されており、勃発して1年足らずで「忘れられた紛争」となりつつあることに懸念の声が広がっています。

ロシナンテスはスーダン各地で緊急支援プロジェクトの実施可能性について、さまざまな信用できるパートナーとともに模索してきましたが、現在のところ実施には至っていません。最近も、ゲジラ州ワドメダニで、避難所施設の衛生設備を改修するプロジェクトを行う段取りを進めていましたが、軍事衝突の激化や通信障害などで現在も調整中の段階です。ロシナンテスは引き続き実現可能な支援活動を模索していきます。みなさまも、ぜひスーダンとスーダンの人々に思いを馳せていただければ幸いです。

02 スーダンだより



エジプトへ逃れた スーダン人スタッフの手記

ロシナンテスのスーダン人スタッフ5名のうち、エジプトに避難しているラビアとのタグワの手記をご紹介します。

2023年11月にエジプトに向かったタグワ

2023年4月15日、家族5人でハルツーム・バハリに住んでいた私たちは、テレビニュースやSNSに投稿される「家から出るな」という警告で目を覚ましました。国軍とRSF(準軍事組織：即応支援部隊)が衝突し、銃声が首都に響き渡り、私たちの家はRSFに包囲されていました。私たちは恐れおののき、恐怖のどん底に突き落とされました。生活は止まり、電気も水もなく、物価は上昇し、病院は閉鎖されました。

私たちは戦争の惨禍から逃れるため、エジプトに向かうことを決めましたが、道のりは険しいものでした。道中武装集団に遭遇し、脅されて他の乗客やバスの運転手とともに現金1500スーダンポンド以上が奪われました。2日後、私たちはエジプトとの国境に到着しましたが、入国手続きに7日間かかりました。通常、スーダン人の女性、子ども、50歳以上の男性は事前のビザなしでエジプトに入国できますが、期限切れのパスポートや緊急旅券では入国することができない決定がなされていたため、スーダン人全員に入国ビザの取得が義務づけられることになりました。私の家族はエジプトに渡ることができましたが、パスポートを持っていない私は、入国ビザを取得するまで北部の町で4カ月を過ごさねばなりませんでした。

今はエジプトにいて安全だと感じていますが、何年も続くかもしれないスーダンの厳しい状況や、仕事が安定しないことに悲しみが残ります。一日も早く戦争が終結し、元通りのスーダンでの日常が無事に戻ってくることを祈っています。



2月にカイロで面会

02 スーダンだより



今年1月にエジプトへ出国したラビア

2023年4月15日、スーダンのハルツームで内戦が勃発したとき、私は子どもたちを安全な場所に連れていくことだけを考えていました。内戦が始まり子どもたちは学校に通えなくなりました。私は夫と2人の子どもたちとともに、エジプトへ北上する長い旅に出ました。



ラビア（右奥）と家族

内戦勃発直後、私たちはハルツームの衝突地域に近い自宅で10日間ほど過ごした後、ハルツーム郊外に移動し、46日間家族(父、母、姉妹、姪)と過ごしました。その後、ハルツームの南210キロのところにある、私が生まれ育った町に移動しました。しかし、ここにはハルツームから逃れてきた人が多く、街は混雑し生活費も高くついたため、6月21日に、今度はハルツームから330キロほど離れたコスティへ移動し、7ヶ月間滞在しました。最終的に、私たちは子どもたちの将来、学校教育のことを考え、スーダンを離れてエジプトに行くことにしました。

エジプトへ北上する陸路の旅は2024年1月12日に始まりました。スーダン南部に位置するコスティからスーダン北部のハルファに向かうのに、まず3つの都市を経由しガダーレフに到着しました。約13時間かけてアトバラへ向かい、その後ハルファへ向かいました。途中、バスがパンクしてしまったので、ハルファに到着したのは2日後でした。ハルファで9日間過ごした後、エジプトに向かいました。国境沿いには大量の難民がいて、国境を越えるのに2時間ほど歩きました。バスとフェリーを使い、エジプト南部の最初の村アブシムブルに到着した後、7時間かけて南部の都市アスワンに到着しました。その後、約1千キロ離れたカイロへ向かいました。

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)に難民として登録し、難民登録カードの取得を進めています。しかし、これは一時的なものなので、さらに滞在ビザを申請する必要があります。とても重要ななできごとは、息子たちを学校の生徒として登録ができたことです。

03 ザンビアだより



結核の早期発見にむけて 見えてきたポータブルX線装置の有効性

ロシナンテスはザンビアで、ポータブルX線装置を使って結核患者の早期発見を目指す事業を行っています。複数の医療施設で装置を共有し活動した結果、検査データから装置の有効性がわかってきました。

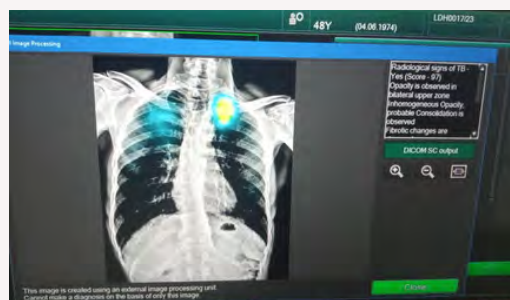


ザンビアではいまだ深刻な感染症

ザンビアでは、年間約5.9万人もの人々が結核に感染し、男性の死因ランキングで6位、女性では7位であり、死亡原因として主要なものとなっています。この高い感染率には、HIV(ヒト免疫不全ウイルス)との重複感染が多いことも一因です。しかし、結核に感染しても、早期発見と治療開始、薬の適切な服用により、8～9割の患者が完治へ向かうことがザンビアでも確認されています。

結核の早期発見には、痰を採取して調べる喀痰(かくたん)検査、尿検査、X線装置で行う胸部X線検査が不可欠です。しかし中央州ではX線装置が配置されていないため、私たちの対象地域であるチサンバ郡やチボンボ郡の医療施設は、主に喀痰検査・尿検査のみを実施してきました。これらの検査のみでは結核患者の見落としが生じる可能性がありました。

こうしたX線検査への医療アクセスを改善するために、ロシナンテスは富士フイルム株式会社さまの協力を得て、同社のポータブルX線撮影装置を試験導入するプロジェクトを始めました。



03 ザンビアだより



4つの医療施設で装置を共有

このポータブルX線装置は、約3.5kgと非常に軽量で持ち運びができ、充電式で場所に縛られず検査が行える仕様になっています。さらに、結核診断に特化した人工知能が搭載されており、医師の診断をサポートすることができます。

中央州チサンバ郡とチボンボ郡にある4つの医療施設を選定し、施設間でX線装置を運搬し共有することで、地域住民が容易にX線検査を受けられるようにしました。また、胸部検査だけではなく、けがなどの他の用途にも使用するようお願いしました。



診療所でX線検査を告知

従来の検査では見逃されていた結核患者を発見

これまでに、4施設合わせて2,400人もの患者がX線検査を受診しました。このうち1,010人が結核と疑われる症状がある患者で、結核の陽性者と診断された方は115名いました。特筆すべき点は、陽性者のうち、喀痰検査では陰性だがX線検査の結果陽性と判明した人が74名もいたことです。これは全ての結核疑い患者の7%もの割合です。今回のX線装置の試験導入により、従来の検査体制では見逃されていた結核患者を発見できるようになったことが、データから明確になりました。

さらに分析すると喀痰検査では、幼児や高齢者、免疫反応の低下により痰の量が減ってしまうHIV感染者に、結核の見逃しが発生しやすいことがわかりました。人口が多い地域や人の移動が頻繁な地域ほど感染者が多くなるということもわかりました。この分析データをもとに州や郡の保健局と対策案を議論し、装置数を増やすこと、対象施設数を増やすことも視野に入れ、富士フイルム株式会社さまと協力しながら活動を続けていきます。

03 ザンビアだより



スマホアプリを活用した 産科健診の実証事業が終了

昨年5月に総務省の助成を受けて始まったプロジェクトが1月末で終了しました。これは、医療情報管理(電子カルテ)の機能をもつスマートフォンアプリSPAQを用いて、デジタル産科健診を医療施設に導入し、有効性を実証するプロジェクトです。SPAQの導入により、医療施設間のコミュニケーションを円滑にし、子宮外妊娠や前置胎盤・癒着胎盤、多胎といったハイリスクなケースの早期特定と、より設備の整った病院へのスムーズな連絡ができることを目指してきました。

1月、このプロジェクトの評価のために、SPAQを使用してきたチサンバ郡の4つの医療施設の医療従事者や、健診を受けた妊産婦にインタビューを実施し、関係者からフィードバックをもらう評価セミナーを開催しました。



医療従事者や妊産婦からは「多胎や逆子など、リスクが高い妊婦を早期に発見でき、早めにより設備の整った病院への紹介ができる」などの好意的な評価が多く見受けられました。一方で、SPAQの情報入力に伴う作業の負担増加や、健診時間の長期化を指摘する声もあり、今後の改善の余地があることがわかりました。ロシナンテスでは、データ入力項目の削減や入力の手間の軽減などのシステム改善を行いながら、引き続きSPAQ利用の促進と導入地域の拡大を模索していきます。

03 ザンビアだより



症状の重い患者の集まる眼科に サングラスを寄贈



2024年2月12日、ライオンズクラブ国際協力会332・C地区眼鏡リサイクルセンター運営委員会さまより寄贈いただいた1千本のサングラスを、ザンビア中央州のカブエ中央病院にお届けしました。

この病院は年間1万2千人の患者を受け入れており、そのほとんどが屋外労働者です。長時間紫外線にさらされた結果、白内障を煩う、角膜や瞳孔へのダメージで視力が低下するなど、生活に支障が生じているケースも多くあります。目へのダメージ予防や術後のケアに、紫外線から目を守るサングラスが重要になりますが、金銭的な余裕がない場合、サングラスの購入費や購入に行くための交通費の捻出ができません。また、病院も予算不足で必要な患者数に応じたサングラスの配布ができずにいました。今回の寄贈品は、病院だけでなく、院外での集団検診でも配布される予定です。これにより、これまで病院にアクセスできなかった患者の症状の予防や術後のケアが効果的に行われるようになります。

04 インタビュー特集



日本から何持ってきた？ ザンビア駐在の必須アイテム

アフリカに滞在しているスタッフは日本から何を持ってきたのでしょうか？駐在員の佐藤と専門家の杉本が、ザンビアに持ってきて良かったもの、持ってきたけど使っていないものについてご紹介します！



駐在員 佐藤の場合



持ってきて良かったものとして紹介してくれたのは、「蚊対策グッズ」です。マラリアにかからないようにするためにも、体や部屋にまく虫よけスプレーは必須アイテムです。またザンビアは日差しが強いため、街を歩くにも村落部を訪問するにも「帽子とサングラス」は必需品です。一方使っていないものは、意外なことに「洗濯ネット」でした。佐藤は手洗いで洗濯をしており、便利な洗濯機のありがたみを感じながら日々過ごしているそうです。



専門家 杉本の場合



杉本は、ザンビアでも自炊中心の生活を送っており、愛用している調理グッズを紹介してくれました。日本から持ってきた調理グッズは多種多様で、包丁や砥石まであり本格的！タッパーや電子レンジで炊飯、蒸すものなど、百均グッズもたくさん持ち込んでいます。電子レンジ蒸し器は、街中で買った肉まんを蒸すのに使っています。ザンビアでも肉まんが買えるのですね！ザンビアで購入できるものもありますが、日本のものの方が品質がよいのだそうです。日本の百均グッズ本当に生活を豊かにしてくれる最強アイテムですね！

04 雲外蒼天



亡国病と恐れられた結核 日本はどう立ち向かったのか

かつて戦前・戦中の日本では、その高い死亡率や感染力のために、結核を「国民病」「亡国病」と呼び恐れてきました。しかし戦後結核患者の減少に成功し、現在の日本はWHOが定義する「低蔓延国」となっています。日本はどのようにして結核患者を減少させることができたのでしょうか。戦後の日本で結核の抑制に効果をもたらしたできごとは、主に以下の3点です。

1) 結核予防ワクチン、BCGの発見

1921年にフランスで初めて投与され、日本では1924年に志賀潔博士が持ち帰りました。1929年に初めて日本人に経口接種され、その後9本針の管針による「経皮接種法」が確立されました。

2) 治療方法の発展

戦前・戦中の日本では、空気のよい所で療養するしかありませんでした。しかし、戦後有効な治療薬の開発と高度な外科手術によって治る病気となり、入院期間も短くなっていきました。

3) 1951年の結核予防法の全面改正

当時国民の30人に1人以上が発病していました。そのため、改正された予防法を軸とした対策（①予防接種による青年以下の予防、②全国民への平等な医療提供、③結核患者の登録と医療機関への指導、④まん延防止措置の実施）が官民総力を挙げて行われました。

今も世界の総人口の4分の1が結核に感染しており、ザンビアも感染者の多い国の1つです。誰もが予防・診断・治療の3つにアクセスできるよう制度や実施体制を整えることが必要です。ロシナンテスではこのうち診断の部分に貢献すべく、ポータブルX線装置を活用した結核事業を行っています。今後ザンビア政府と連携し、さらなる普及、活用を行っていく予定です。

04 日々ツラツラ日記



JICAスーダン事務所開設35周年 オンラインイベントに登壇

スーダン駐在員の七條です。
2024年3月7日に、ODA70周年・JICAスーダン事務所設置35周年を記念した日本とスーダンの大学交流イベントに登壇しました。現在カイロに拠点を移しているJICAスーダン事務所と、熊本大学をオンラインで繋ぎ開催されました。



イベントでは、現在カイロに滞在しているハルツーム大学の学生や、ハルツーム大学から熊本大学に留学しているハリッド氏によるプレゼンテーションなどが行われました。スーダンへの協力やODAへの理解を促すこと、ハルツーム大学と熊本大学の連携強化を目指すことが発信されました。ロシナンテスからは、私がエジプトのカイロから、理事長川原が熊本大学からオンラインで参加し、これまでのスーダンでの活動などを紹介しました。

印象に残っているのは、ハルツーム大学のサミール教授の言葉です。学生たちに、現在の軍事衝突が終わった後のスーダンの未来を見据えるようにメッセージを送っていました。そして太平洋戦争後、日本が速やかに戦後復興した経験を例に挙げ、スーダン復興の際には日本の経験を活かした協力を願うと私たちに述べられました。現状を憂うだけではなく、あくまでも未来を見据えようとする力強さに心打たれました。

05 イベント、国内活動



参加費無料 報告会、イベント開催！！

■2024年4月15日（月）20:00~21:00

スーダン情勢報告会（オンライン）

アフリカ・スーダンの首都ハルツームで、2023年4月15日の現地時間朝より、軍事衝突が始まりました。なぜ内戦が起きてしまったのか、現在の現地の状況はどうなっているのか、改めてお伝えするとともに、ロシナンテスのローカルスタッフの声や今後の活動の見通しをお届けします。またイベント後には、皆さまからもメッセージをいただき、私たちがつながっているスーダンの人々に届けられればと思います。

[>>申し込みはこちら](#)

■2024年6月15日（土）15:30~17:00

2023年度活動報告会（北九州）

2023年度の活動を振り返る報告会を開催します。ザンビアで実施しているマザーシェルター建設、エコーの導入、モバイルX線を活用した結核事業について、現地からの報告も交えながらご報告します。また2023年4月に軍事衝突が発生して以来、再入国が叶っていないスーダンの現状についてもご共有します。

[>>申し込みはこちら](#)

■2024年4月27日（土）14:30~16:20

〈認定NPO法人テラ・ルネッサンスさんが主催するイベントに理事長の川原が登壇します〉（大阪）

大阪で開催される「2人の国際協力NGO創設者が志を語る！～支援の現場から見えた平和への道筋～」に理事長の川原が登壇します。1人では途方もなく遠く感じてしまう「平和」について、諦めず前に進むためにできることを、認定NPO法人テラ・ルネッサンス創設者の鬼丸昌也さんと語り合います。

[>>申し込みはこちら](#)

05 イベント、国内活動



1月13日（土）【ご支援者様限定】 2023年を振り返って

1月13日にオンラインによるご支援者様限定報告会を開催しました。駐在員の七條と田中よりスーダン・ザンビアでの2023年の活動を報告するとともに、理事長の川原より2024年の活動や今後の展望についてご説明しました。質疑応答の一部をご紹介します。

Q 国内における教育事業ではどのようなことを行っていますか。

A（川原） アフリカが貧しいという観点ではなくて、アフリカの人々の生き方を学ぶことが、今の日本の参考になるのではないかと考え、小中学校で出前授業をしています。電気がない、水がないアフリカを知り、日本の日常のありがたみを知ってもらいたいです。彼らが大学生・社会人になったときにアフリカに来てもらいたいし、アフリカで起業したいという人がでてきたらいいなと期待しています。



3月9日（土） ロシナンテス活動報告会 & 写真展ツアー

3月9日に福岡県北九州市の西日本工業大学小倉キャンパスで活動報告会を開催しました。60名以上にご参加いただき、理事長の川原より活動を始めた経緯やスーダン・ザンビアでの現在の活動をお伝えしました。



報告会終了後は、近隣会場で開催の写真展「アフリカを知る活動展示会～医とところと人～」に移動し、ザンビアでの活動を撮影くださった写真家上山敦司さんと川原による写真展ツアーを行いました。参加者の皆さまからは「一つ一つの生のエピソードがどれも魅力的で衝撃的で印象深かった」などうれしい感想をいただきました。

05 イベント、国内活動

能登半島地震の支援を行っています

ロシナンテスは、災害医療活動を行う特定非営利活動法人HuMA(Humanitarian Medical Assistance:災害人道医療支援会)と共同で、能登半島地震の被災者支援を行いました。

ロシナンテスでは主に、ボランティアの募集・派遣や車両の調達といった後方支援を担い、1月末から2月下旬にかけて医師2名、看護師3名を派遣することができました。ご応募くださいました皆さまや情報拡散にご協力くださいました皆さまに心より御礼申し上げます。

また、孤立した住宅やほかの施設への往診を行うために必要な車両が足りていなかったため、ロシナンテスは車両2台を調達しHuMAに貸与を行いました。

2台の車両は、J.S.Foundationさまからのご支援で購入いたしました。J.S.Foundationさまからのご支援は、浜田省吾さんの事務所からとコンサート会場での募金が集まったものです。ご協力いただきました皆さまに心より感謝をお伝えしたいと思います。



HuMAの珠洲市での活動は、2024年2月末をもって終了しましたが、現地で活動を継続する認定NPO法人ピースウィンズ・ジャパンへ引き続き車両2台の貸与を決定しました。貸与した車両はおもに珠洲市での避難所訪問や物資調達・配布をはじめとする被災者支援活動に使われる予定です。

05 イベント、国内活動



「アフリカから学ぶ国際教育プロジェクト」 出前授業を行いました

2023年10月から2024年3月まで、北九州市の企業版ふるさと納税による協働事業「アフリカから学ぶ国際教育プロジェクト」を実施しました。これは、国際社会で活躍できる人材を育成するため、子どもたちや市民にグローバルな視野を広げる学びの場を提供するプログラムです。

活動の1つとして、アフリカでの生活経験があり元小学校教諭である川原佳代が、市内の小学校9校で出前授業を行いました。授業では、北九州市出身の理事長川原尚行が行うスーダンやザンビアでの支援活動を取り上げました。また、イスラム教など異文化に接する機会を作るとともに、2023年4月に起きたスーダンでの軍事衝突の話では「平和」について考えてもらいました。



実施してみると、休憩中に質問に来る子もいるなど、子どもたちの関心の高さに驚かされました。本プロジェクトは3月で終了となりますが、ロシナンテスはこれからも、未来を担う子どもたちへの発信の機会を作っていきたいと考えています。

講師の川原佳代よりコメント

児童や生徒たちには、新たな気付きや学びを通して、世界の国々に関心を持ち、「日本の当たり前」「それぞれの国の当たり前」から日本の素晴らしさを知り、視野を広げてほしいです。



06 事務局からのお知らせ



異動や転勤で整理した本、お送りください！ 古本寄付キャンペーン開始

<キャンペーン概要>

◆期間／2024年3月1日～4月30日（つなぐ書店への品物到着日）

◆収集対象／ご自宅に眠っている古本など

※受付可能な種類については下記ウェブサイトを参照

◆キャンペーン特典／アフリカ布の三角しおり（先着100名様）

◆古本寄付詳細／<https://hon-bokin.jp/rocinantes>



古本寄付とは、不要な本やDVDを「つなぐ書店」にお送りいただくと、その査定額が全額ロシナンテスへの寄付金になる、という取り組みです。つなぐ書店で働く皆さんのお仕事創出にもつながります。



古本キャンペーンの寄付金は、ザンビアでのマザーシェルター建設に使用されます。ご協力いただいた方に、アフリカ布で作った三角しおりをプレゼントします！ザンビアの妊婦さんたちが愛用するアフリカ布で、現地の風を感じていただけたらうれしいです。



切手や書き損じハガキを集めています！

◆図書券、商品券などの金券、収入印紙

◆未使用・使用済みテレホンカード

◆書き損じ・未使用はがき

◆未使用・使用済みプリペイドカード

◆未使用・使用済切手

封筒に入れてロシナンテス事務局までお送りください。

※受け取り書の送付には、1～2か月ほどお時間をいただきます。

06 事務局からのお知らせ



**スーダンの人々へのメッセージを
募集します【2024年5月15日まで】**

#KeepEyesOnSudan

スーダンは現在も混乱の最中にあり、多くの人々が地方部へ異動したり国外へ非難したりしている状況です。「忘れられた紛争」になりつつあるスーダンの人々への連帯の気持ちを届けるべく、皆さまからのメッセージを募集します。お送りいただいたメッセージは、アラビア語に翻訳し、ウェブサイト等にまとめた上で、SNSやチャットツールでスーダンの人々に届けたいと思います。

〈必須内容〉

メッセージ（手書きの絵や画像も可※ご返却はできません）

お名前※匿名可（ウェブサイト、広報物等に掲載可能なもの）

〈応募方法〉

◆専用webフォーム：

<https://forms.gle/38LZ98fn5g1kNYik6>

◆メール：info@rocinantes.org

◆FAX：093-521-6471

◆郵便：〒802-0082

福岡県北九州市小倉北区古船場
町1番35号 北九州市立商工貿易
会館 7F

認定NPO法人ロシナンテス宛



イベント会場募集中！

会場を貸してくださる方を募集しています。

・収容人数：30～100名程度

・場所：公共交通機関でのアクセスが可能

ご協力いただける方は以下よりご入力をお願い申し上げます。

<https://forms.gle/mNhHQYE5EpXmwGzB8>

06 事務局からのお知らせ

事務局だより

スーダンでの軍事衝突発生から一年、それ以外にも激動としかいえない国内外の情勢のなか、多くの皆さまから変わらぬご支援をいただいていることに厚く御礼申し上げます。本部の向かいにある旦過市場の再建復興・再開発がようやく動き始めたところに、新年早々の鳥町食堂街での大火事がおきました。身近なところもなかなか落ち着きませんが、少しでも明るく前向きに進めるよう努めていきます。日本の端っこにあるロシナンテスですが、他団体との協働や連携が日常の光景になりつつあります。ロシナンテスだけではできないことも、複数の団体で手持ち資源を出し合うことで実施可能になります。能登半島地震の被災地支援もそうですし、事務仕事でも他団体との連携が行われるようになっていきます。活動当初からすると信じられない変化ですが、今後とも自分にやれることを精一杯やっていこうと思います。